

これは志賀先生が「つくば子どもと教育相談センター通信169号」に寄稿されたものです。呼吸器を付けた状態で、時間制限のもとで書き続けられ、出来上がった通信を病院にお持ちすると、「ご苦労様」と筆談されました。お亡くなりになる数時間前のことです。

## 子どもと「向き合う」、「寄り添う」ことに思う

我が命、闘いとりて、今生きる。

志賀伸三郎

難病と言われている ALS・筋萎縮性側索硬化症は自分にとって信じがたい病気であって、自分の体であって自分の体でない思いでいっぱいである。この闘病生活の中で体験した思いを通して上記のテーマについて述べてみたい。

私は今、治療のために一日の24時間中「酸素吸入器」を身につけ縛られている状態である。まさに「まな板の鯉」のようである。だから体も心も閉塞状態といって差し使えない。昼間はいいのであるが、消灯時間の9時から翌朝の5時までの中で、よく睡眠できるときはいいが、睡眠が浅いときに非現実的な夢を見る。このときに「寄り添うこと」の真の意味を体験することがしばしばある。このことを通して「テーマ」について述べてみようと思う。改めて「寄り添う、聴くこと、」ことの幾つかを挙げてみたい。

### 1 「子どもの『声』を聴く」ことの意味

不登校、いじめ、ひきこもりに苦しんでいる子どもや若者たちは、いつも自分を否定的に見ている場合が多い。それは、自らの意志でなく彼の周りいる親や教師の彼らに対する見方が「否定的なので」必然的にそうならざるをえない。苦しんで、苦しんで「自分を否定的に」見ざるをえなくなっていく。改めて子どもの「声を聴くこと」、「見守ること」の意味は

①子どもの声を聴くということは「受動的」に見えるが、本当は自らの意志を親や教師に訴えるという「能動的」な行動であるということ周りのものは認識すべきである。ぎりぎりの勇気あることと思うべきである。

②子どもの言葉を育てる。どうしてもこれだけは言わなければならないと思うことによつてとぎれとぎれの言葉であっても、苦しい言葉の中から自分の言いたいことを言うという表現が自分を育てることになる。こんなことをいったら「何を馬鹿なことを言うと非難されるであろう」と思いながらもどうしても言わなければ自分がなくなるという思いが常にある。でも言いたいという勇気が彼の中に存在する。その言葉を聞いてくれる親や教師がそばにいるだけで、安心してものを言える。(表現力をつける)

③自分の心に響き合う心を育てる。彼らの言葉をその周りのものが素直に受け入れることにより、僕を信じる人が自分の周りに存在するという安心感が自己肯定感を育てる。(他者の言葉に心を開く)

④自信を持てる子どもを育てる（心を育てる・・・自己肯定感）

⑤子どもの全体を育てる（自分を信ずることが出来る）

しかし、これは鍛えないと出来ない。想像力、思考力を育てる。さらに大切なことは、言葉を補ってやる。「こんなこと言いたいのでしょうか」と。このようなプロセスを通しながら、自分の困難を少しずつ克服していくものである。

## 2 現実と非現実の境目が分からなくなる

はじめに述べたように僕は「一日中酸素吸入器」で縛られているので夜寝ているとき「非現実の世界」に入りやすい。特に眠りが浅いときにその世界に入りやすい。僕が「非現実の世界」に入ることと、不登校で学校に行けない子どもや、ひきこもりでがんじがらめになっている若者たちの思いが共通している場合があるといえる。「非現実の世界」で自分を見失うのは僕の場合ほとんど深夜である。夢うつつの中で狭い狭い枠の中に入りこんだ自分がこの枠から抜けたいと懸命にもがくが、どうにもならない自分がいて、最後には完全にパニックになり、とうとう我慢ができずナースコールでその夜当直のナースを呼ぶ。

僕は無意識のうちにそのナースに「どうしていいか分からない」といい続ける。僕自身が「何をどう打開してよいか分からない」のだからナースにとっては「この人は何を言いたいのか」理解できるはずはおそらくないだろう。僕は何回も何回も、「どうしていいか分からない」と言うだけである。まして「非現実の世界」の中にいる自分がいい続けるのだから「いい方法」なんて出るわけがない。このときの心情は苦しみの連続である。ただ出来るのは「どうすればいいの、どうすればいいの」の言葉を発するだけである。自分が何がなにやら分からなくなったときにナースコールによってベッドに来てくれたナースの対応の違いである。

①「何を言おうとしているのか分からないから、最初だまって聞いているが、そのうち"何を言いたいのか聴いても仕方がない"と思ってその場を黙って立ち去る」この型のナースが多い。まさに呆れ顔のようである。

②ベッドのそばに居てしばし僕の「非現実の話」に付き合うナースもいる。しかし、多くはない。でも救いになるのは「僕の話にうなずいてくれている」ナースがいることである。

③このとき大切なことは「僕の非現実の世界」に共に入り込むことである。難しいことではあるが、それは「こうすべきである」という「答え」をいうことではない。「今、何をどうしてよいか苦しんでいるのですね」、「一日中、縛られていては辛いですよ」、「どうしてよいか分からないのですね」、「辛い思いをしているのが分かりますよ」、など、僕の束縛された思いに心を馳せることが「寄り添う」ことです。

また、ナース自身が「僕自身が非現実の中で苦しんでいる」という理解さえもないので、僕の苦しみに心から「寄り添う」ことは到底期待できないのが本当ではないだろうか。救われることは、ナースによってベッドの上から見下ろすのではなく、ベッドと同じ高さ自分の身をおいて真剣に僕の話に耳を傾けるナースもいる。ただそれだけでも救われる思い

がある。ともかく、「非現実の世界」に入り込んでいるのだから「的確な解決方法」はそう簡単に見出すことはできないのである。ナースによっては「もう朝が明けますよ」とか、「電気をつけてみますか」と言って「非現実の世界から、現実の世界」に転換する方もいる。

僕の一番の「非現実の世界からの脱出」は、この頃は「ラジオ深夜便」を聞くことである。この放送を聴くことを通して「現実の世界」に戻ることにしている。そのうち夜が明けて周りがしらずんできることによって、今までがんじがらめの狭い枠が消え、自分がいる部屋の状況が自分の視覚で認識できるようになると今まで自分を苦しめていた「非現実の世界」がなくなっていく。それまでの時間が何十分続くか分からないが、本当に苦痛の連続である。

### 3 苦しんでいる子どもや若者たちに親はどう「寄り添え」ばよいか

親のやれることはいくつかあるが、もし子どもや若者がベッドに寝ていたらベッドの上から、または布団の上からいだった言葉をかけるのではなく、ベッドや布団と同じ高さで自分の姿勢をおいて言葉をかけることが大切である。「今日はよく眠れたかな、登校なんて気にしないでゆっくり寝ることが大事よ、お前が登校できないことはよくよく考えて自分で選びとったことだから、お母さんとお父さんはお前の勇気ある行動をしっかり認めるから一人で悩まないでね」とか、「今日のご飯はお前の好きなものをお母さんが一生懸命作ったから起きて一緒に食べない」、「今日お母さんと一緒に買い物に行かない。ついでにお前の洋服を買ってあげたいと思うから」、「今日お母さんにお弁当を作ってもらってお父さんと筑波山に登らないか、もしそれが実現できればお父さんはとてもうれしいけど」、など、学校に行けないことを責めるのではなく、親や家族を含めて楽しいことを子どもとやれること本当にうれしく、楽しみであることを伝えることである。これはまさに「教育家族」から「生活家族」への変換である。この変換は親と子の閉じられた関係だけではかなり難しい。「親の会」などの会合の中で体験者同士の学びで獲得することである。子どもや若者は自分を肯定してくれる親や教師が一人でもいるだけで自分を「肯定的」に変えることができるのである。子どもや若者たちは自分の苦しみから逃れるために、深夜「アニメの映画」を見たり、「ラジオ深夜便」を聴いて「非現実の世界」から逃げようとしているのであろう。

子どもに「寄り添う」ということは、親が学びを通して獲得し、勇気を通して実践することである。